

Contents

1		3
1.1	3
1.2	3
1.3	3
1.4	4
2		5
2.1	5
2.2	5
2.3	5
2.4	6
2.5	6
2.6	6
3		7
3.1	7
3.2	7
3.3	7
3.4	7
3.5	8
3.6	8
3.7	8
4		9
4.1	9
4.2	9
4.3	9
4.4	9
4.5	9
4.6	10
4.7	10
5		11
5.1	11
5.2	11
5.3	12
5.4	12
5.5	12
5.6	13
6		14
6.1	14
6.2	14
6.3	14
6.4	15
7		16
7.1	16
7.2	16
7.3	17
7.4	18

7.5	19
8	20
8.1	20
8.2	20
8.3	20
8.4	21
9	23
9.1	23
9.2	23
9.3	24
9.4	24
9.5	25
9.6	25
10	26
10.1	26
10.2	26
10.3	26
11	27
11.1	27
11.2	27
11.3	27
11.4	28
11.5	28
11.6	29
12	30
12.1	30
12.2	30
12.3	30

1**1.1****(1)**

1. $\forall A = (a_{ij}), B = (b_{ij}), C = (c_{ij}) \in M_n(\mathbb{R}), (A + B) + C = (a_{ij} + b_{ij}) + (c_{ij}) = a_{ij} + (b_{ij} + c_{ij}) = A + (B + C)$
2. $\forall A \in M_n(\mathbb{R}), A + 0 = 0 + A = A$
3. $\forall A = (a_{ij}) \in M_n(\mathbb{R}), (a_{ij}) + (-a_{ij}) = 0$ から逆元も存在
4. $\forall A, B \in M_n(\mathbb{R}), A + B = (a_{ij} + b_{ij}) = (b_{ij} + a_{ij}) = B + A$
5. $\forall A \in M_n(\mathbb{R}), AE = EA = A$
6. $\forall A, B, C \in M_n(\mathbb{R}), A(B + C) = \sum_{k=1}^n a_{ik}b_{kj} + \sum_{k=1}^n a_{ik}c_{kj} = AB + BC$
 $(A + B)C = \sum_{k=1}^n a_{ik}c_{kj} + \sum_{k=1}^n b_{ik}c_{kj} = AC + BC$
7. $\forall A, B, C \in M_n(\mathbb{R}), (AB)C = \sum_{k=1}^n \left(\sum_{l=1}^n a_{il}b_{lk} \right) c_{kj} = \sum_{l=1}^n a_{il} \left(\sum_{k=1}^n b_{lk}c_{kj} \right) = A(BC)$

(2)

$\forall A, B \in M_n(\mathbb{R}), AB \neq BA$ から, $M_n(\mathbb{R})$ は可換環ではない

1.2

1. $\forall f, g, h, ((f + g) + h)(x) = (f + g)(x) + h(x) = f(x) + g(x) + h(x) = f(x) + (g + h)(x) = (f + (g + h))(x)$
2. $\forall f, (f + 0)(x) = f(x) = (0 + f)(x)$
3. $\forall f, (f - f)(x) = 0 = (-f + f)(x)$
4. $\forall f, g, (f + g)(x) = f(x) + g(x) = g(x) + f(x) = (g + f)(x)$
5. $\forall f, (f1)(x) = f(x) = (1f)(x)$
6. $\forall f, g, h, (f(g + h))(x) = f(x)(g + h)(x) = (fg)(x) + (fh)(x)$
 $((f + g)h)(x) = (f + g)(x)h(x) = (fh)(x) + (gh)(x)$
7. $\forall f, g, h, ((fg)h)(x) = f(x)g(x)h(x) = (f(gh))(x)$

1.3

$M_n(\mathbb{R})$ は可換環ではないから, 体ではない

$\forall \mathbb{Z} \ni a \neq \pm 1, \frac{1}{a} \notin \mathbb{Z}$ から, 体ではない

$\mathbb{Q}, \mathbb{R}, \mathbb{C}$ は体である

1.4

$\mathbb{Q}[\sqrt{2}]$ は可換環であるから, $\forall (a + b\sqrt{2}) \in \mathbb{Q}[\sqrt{2}] \setminus \{0\}$, $(a + b\sqrt{2})$ は可逆元であることを示せばいい

$a + b\sqrt{2} \neq 0$ から $\frac{1}{a + b\sqrt{2}} = \frac{a - b\sqrt{2}}{a^2 - 2b^2} = \frac{a}{a^2 - 2b^2} - \frac{b}{a^2 - 2b^2}\sqrt{2}$ で, $\frac{a}{a^2 - 2b^2}, -\frac{b}{a^2 - 2b^2} \in \mathbb{Q}$ から, $\frac{1}{a + b\sqrt{2}} \in \mathbb{Q}[\sqrt{2}]$ かつ $(a + b\sqrt{2})\frac{1}{a + b\sqrt{2}} = \frac{1}{a + b\sqrt{2}}(a + b\sqrt{2}) = 1$ よって, $\mathbb{Q}[\sqrt{2}]$ は体である

2

2.1

(1)

$R = \mathbb{Z}[\sqrt{2}] = \{a + b\sqrt{2} : a, b \in \mathbb{Z}\}$ と定義するから, $a + b\sqrt{2}, c + d\sqrt{2} \in R$ に対して

$$(a + b\sqrt{2}) + (c + d\sqrt{2}) = (a + c) + (b + d)\sqrt{2} \in R \quad (1)$$

$$(a + b\sqrt{2})(c + d\sqrt{2}) = (ac + 2bd) + (ad + bc)\sqrt{2} \in R \quad (2)$$

\mathbb{Z} の単位元は 1 であるから, $1 = 1 + 0\sqrt{2} \in R$ は R の単位元である. 以上より, R は \mathbb{R} の部分環である

(2)

$\forall a + b\sqrt{2}, c + d\sqrt{2} \in R$ に対し, $(a + b\sqrt{2})(c + d\sqrt{2}) = 0$ と仮定すると

$$(ac + 2bd) + (ad + bc)\sqrt{2} = 0 \text{ となり, } \begin{cases} ac + 2bd = 0 \\ ad + bc = 0 \end{cases}$$

すると, $a + b\sqrt{2} \neq 0$ なら, $c + d\sqrt{2} = 0$ から, R の零因子は 0 のみである. よって, R は整域である

2.2

$$\forall \bar{i}, \bar{j} \in \mathbb{Z}/n\mathbb{Z}, \bar{i} \cdot \bar{j} = (i + m\mathbb{Z})(j + n\mathbb{Z}) = ij + (in + mj + mn)\mathbb{Z} = \overline{ij}$$

$$\text{また, } \bar{j} \cdot \bar{i} = (j + n\mathbb{Z})(i + m\mathbb{Z}) = ji + (jm + ni + mn)\mathbb{Z} = \overline{ji}$$

よって, $\bar{i} \cdot \bar{j} = \bar{j} \cdot \bar{i}$ が成り立つから, 可換環である.

また, $\mathbb{Z}/6\mathbb{Z}$ に対して, $\bar{2}, \bar{3} \in \mathbb{Z}/6\mathbb{Z}$ で, $\bar{2} \cdot \bar{3} = \bar{6} = \bar{0}$ となるから, $\bar{2}, \bar{3}$ は零因子である. よって, 整域ではない

2.3

(1)

$u \in R$ が単元であるから, $\exists v \in R, s.t. uv = 1$ が成り立ち, R が可換環であるより, $vu = 1$ である. よって, $uv = vu = 1$

u を零因子とすると, $\exists v' \in R, s.t. uv' = 0$ が成り立つ. また, R が可換環であるから, $v'u = 0$ である. よって, $uv' = v'u = 0$ が成り立つ. $v' \in R \setminus \{0\}$ だから, $u = 0$ である. これは単元の定義に反する. よって, u は零因子ではない

(2)

R を体とすると, R の任意の非零元は単元であり, (1) より零因子ではない. よって, R は整域である

(3)

R は整域であるから, 任意の非零元は零因子ではない. $\forall a, b \in R, 0 \neq c \in R, ac = bc$ なら両辺に c の逆元 c^{-1} をかけて, $a = acc^{-1} = bcc^{-1} = b$ が成り立つ. よって, $a = b$ で, 簡約律が成り立つ

2.4

$\bar{1} \in R$ を $f(x) = x^4 + \bar{3}x^3 + \bar{2}x + \bar{4}$ に代入すると, $f(\bar{1}) = \bar{1} + \bar{3} + \bar{2} + \bar{4} = \bar{10} = \bar{0}$ であるから, $\bar{1}$ は根であり, $(x - \bar{1})$ は $f(x)$ の因子である. 簡約すると, $f(x) = (x - \bar{1})(x^3 + \bar{4}x^2 + \bar{4}x + \bar{1})$ となる, $\bar{1}$ を $x^3 + \bar{4}x^2 + \bar{4}x + \bar{1}$ に代入すると, $\bar{0}$ になるから, $f(x) = (x - \bar{1})^2(x^2 + \bar{4})$. また, $\bar{4} = -\bar{1}$ から, $f(x) = (x - \bar{1})^3(x + \bar{1})$

2.5

R が整域であるから, R の任意の非零元は零因子ではない. $R[x]^\times$ は多項式環 $R[x]$ の単元全体の集合であるから, $\forall u(x), v(x) \in R[x]^\times, u(x)v(x) = v(x)u(x) = 1$
 $0 = \deg 1 = \deg(u(x)v(x)) = \deg(u(x)) + \deg(v(x))$ かつ $\deg(u(x)), \deg(v(x)) \geq 0$ であるから, $\deg(u(x)) = \deg(v(x)) = 0$ である. だから, $u(x), v(x)$ は定数多項式で, $u(x) := a_0, v(x) := b_0$ とおくと, $a_0, b_0 \in R$. また, $u(x), v(x)$ は単元であるから, $a_0b_0 = b_0a_0 = 1$ で, a_0, b_0 も R の単元である. a_0, b_0 の任意性より, $R[x]^\times = R^\times$

2.6

(1)

$R = \mathbb{Z}/2\mathbb{Z}$ は $\bar{0}$ と $\bar{1}$ だけであるから, それぞれ代入すると $\begin{cases} f^*(\bar{0}) = \bar{0}^2 + \bar{0} \\ f^*(\bar{1}) = \bar{1}^2 + \bar{1} = \bar{0} \end{cases}$ から,
 $\forall a \in R, f(a) = 0$ である

(2)

$h(x) := f(x) - g(x) \in R[x]$ とする. $f(x) \neq g(x)$ であるから, $h(x) \neq 0$. また, 零でない多項式 h は $\deg h$ 以下個の根しか存在しないから, $\deg h = d$ とすると, $h(x) = 0$ となる x は高々 d 個である. R は無限集合であるから, $\exists a \in R, s.t. h(a) \neq 0$ である. よって, $h^* \neq 0$ で, $f^* \neq g^*$ である

3

3.1

$a + n\mathbb{Z} = a' + n\mathbb{Z}$ かつ $b + n\mathbb{Z} = b' + n\mathbb{Z}$ と仮定すると, $a = a' + nk, b = b' + nl, (k, l \in \mathbb{Z})$ であり, $ab = (a' + nk)(b' + nl) = a'b' + (a'nl + b'nk) + kln^2$ であるから, $ab - a'b' = (a'nl + b'nk) + kln^2 = n(a'l + b'k + kln)$ となり, $n \mid (ab - a'b')$ となる. よって, $ab \equiv a'b' \pmod{n}$ で, $ab + n\mathbb{Z} = a'b' + n\mathbb{Z}$. したがって, $(a + n\mathbb{Z})(b + n\mathbb{Z}) = ab + n\mathbb{Z}$. よって, well-defined である

3.2

(1)

$\bar{1} : \bar{1} \cdot \bar{1} = \bar{1}, \forall \bar{k} \in \mathbb{Z}/12\mathbb{Z}, \bar{1} \cdot \bar{k} \neq \bar{0}$ から, 逆元は $\bar{1}$ で, 零因子ではない
 $\bar{2} : 2 \mid 12$ であるから, 逆元は存在しないが, $\bar{2} \cdot \bar{6} = \bar{12} = \bar{0}$ となるから, $\bar{2}$ は零因子である
 $\bar{3} : 3 \mid 12$ であるから, 逆元は存在しないが, $\bar{3} \cdot \bar{4} = \bar{12} = \bar{0}$ となるから, $\bar{3}$ は零因子である
 $\bar{4} : 4 \mid 12$ であるから, 逆元は存在しないが, $\bar{4} \cdot \bar{3} = \bar{12} = \bar{0}$ となるから, $\bar{4}$ は零因子である
 $\bar{5} : \bar{5} \cdot \bar{5} = \bar{25} = \bar{1}$ から, 逆元は $\bar{5}$ で, 零因子ではない
 $\bar{6} : 6 \mid 12$ であるから, 逆元は存在しないが, $\bar{6} \cdot \bar{2} = \bar{12} = \bar{0}$ となるから, $\bar{6}$ は零因子である
 $\bar{7} : \bar{7} \cdot \bar{7} = \bar{49} = \bar{1}$ から, 逆元は $\bar{7}$ で, 零因子ではない
 $\bar{8} : 4 \mid 12$ であるから, 逆元は存在しないが, $\bar{8} \cdot \bar{3} = \bar{24} = \bar{0}$ となるから, $\bar{8}$ は零因子である
 $\bar{9} : 3 \mid 12$ であるから, 逆元は存在しないが, $\bar{9} \cdot \bar{4} = \bar{36} = \bar{0}$ となるから, $\bar{9}$ は零因子である
 $\bar{10} : 2 \mid 12$ であるから, 逆元は存在しないが, $\bar{10} \cdot \bar{6} = \bar{60} = \bar{0}$ となるから, $\bar{10}$ は零因子である
 $\bar{11} : \bar{11} \cdot \bar{11} = \bar{121} = \bar{1}$ から, 逆元は $\bar{11}$ で, 零因子ではない

(2)

$\bar{3} \cdot \bar{x} = \bar{0}$ であるから, $3x = 12k, k \in \mathbb{Z}$. また, $0 \leq x < 12$ であるから, $x = 0, 4, 8$

3.3

$\bar{33} \cdot \bar{a} = \bar{1}$ とすると, $33a = 124b + 1$ である. 拡張ユークリッドの互除法により

$$\begin{pmatrix} 1 & 0 & 33 \\ 0 & 1 & 124 \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} 1 & 0 & 33 \\ -3 & 1 & 25 \end{pmatrix} \quad (3)$$

$$\rightarrow \begin{pmatrix} -3 & 1 & 25 \\ 4 & -1 & 8 \end{pmatrix} \quad (4)$$

$$\rightarrow \begin{pmatrix} 4 & -1 & 8 \\ -15 & 4 & 1 \end{pmatrix} \quad (5)$$

よって, $a = -15$ であり, $\bar{a} = \overline{-15} = \overline{124 - 15} = \overline{109}$ である

3.4

単元は $\mathbb{Z}/n\mathbb{Z}$ の n と互いに素な剰余類であるから, $\phi(24) = 8$ より, 単元は $\{\bar{1}, \bar{5}, \bar{7}, \bar{11}, \bar{13}, \bar{17}, \bar{19}, \bar{23}\}$ である

3.5

(1)

n が素数であるとき, $\forall k \in \mathbb{Z}/n\mathbb{Z}, \gcd(k, n) = 1$ で, 整域になる

自分自身が逆元になる $\iff \forall \bar{a} \in \mathbb{Z}/n\mathbb{Z}, \bar{a}^2 = \bar{1} \iff \bar{a}^2 - \bar{1} = 0 \iff (\bar{a} - \bar{1})(\bar{a} + \bar{1}) = 0$

よって, $\begin{cases} \bar{a} - \bar{1} = 0 \\ \bar{a} + \bar{1} = 0 \end{cases} \implies \bar{a} = \bar{1} \text{ または } \overline{n-1} \text{ である}$

(2)

n は素数でないとき, $\mathbb{Z}/n\mathbb{Z}$ は必ず整域となるとは限らないから, $\bar{0}$ 以外の零因子が存在する. 例として, $n = 6$ で, $\bar{2} \cdot \bar{3} = \bar{0}$ である. よって, $\bar{2}, \bar{3}$ は自分自身が逆元ではない

3.6

(1)

f_a は単射で, R は有限個の元を持つから, 全射でもある. よって, f_a は全単射である. よって $\exists x \in R, s.t. f_a(x) = 1$ となる. 言い換えれば, $ax = 1$ で, $x = a^{-1}$ は a の逆元である. なお, R は可換環であるので, $xa = 1$ も成り立つ. よって, a は単元である

(2)

零元自体は零因子であるから, 以下は $a \in R \setminus \{0\}$ を考える. a が零因子でないと仮定すると, $ax = ay \implies a(x - y) = 0 \implies x - y = 0 \implies x = y$ となるから, f_a は単射である. 逆に a が単元でないなら, $f_a = ax = 1$ の解は存在しないから, f_a は全射でない. また, R は有限集合であるから, 単射でもない. よって, $x \neq y$ で, $ax = ay$ より, a は零因子である

3.7

(1)

R は整域で, $a \neq 0$ であるから, $\exists a^{-1}, s.t. aa^{-1} = a^{-1}a = 1$ が成り立つ. $f_a(x) = f_a(x)$ とすると, $ax = ay$ となり, $a(x - y) = 0$ となる. R は整域なので, a は零因子ではないから, $x = y$. よって, $f_a(x)$ は単射である

(2)

R は整域なので, $\forall a \in R \setminus \{0\}, a$ は零因子ではない. また, (1) より f_a は単射であり, R は有限集合であるから, f_a は全単射である. よって $\forall a \in R \setminus \{0\}, \exists x \in R, s.t. f_a(x) = ax = 1$ で, $x = a^{-1}$ は a の逆元である. よって, R は体である

4

4.1

$$\forall \bar{a}, \bar{b} \in n\mathbb{Z}, \overline{a+b} = \bar{a} + \bar{b} \in n\mathbb{Z}$$

$\forall \bar{a} \in n\mathbb{Z}, k \in \mathbb{Z}, k\bar{a} = \overline{ka} \in n\mathbb{Z}, \overline{ak} = \bar{a}k \in n\mathbb{Z}$ から, $n\mathbb{Z}$ は \mathbb{Z} の両側イデアルである

4.2

$$\forall \begin{bmatrix} a & b \\ c & d \end{bmatrix} \in M_2(\mathbb{R}), \forall \begin{bmatrix} x & 0 \\ y & 0 \end{bmatrix}, \begin{bmatrix} a & b \\ c & d \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x & 0 \\ y & 0 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} ax & 0 \\ cx & 0 \end{bmatrix} \in I \text{ で}$$

$$\forall \begin{bmatrix} x_1 & 0 \\ y_1 & 0 \end{bmatrix}, \begin{bmatrix} x_2 & 0 \\ y_2 & 0 \end{bmatrix} \in I, \begin{bmatrix} x_1 & 0 \\ y_1 & 0 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x_2 & 0 \\ y_2 & 0 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} x_1x_2 & 0 \\ y_1x_2 & 0 \end{bmatrix} \in I$$

よって, I は $M_2(\mathbb{R})$ の左イデアルである

$\forall \begin{bmatrix} x & 0 \\ y & 0 \end{bmatrix} \in I, \forall \begin{bmatrix} a & b \\ c & d \end{bmatrix} \in R, \begin{bmatrix} x & 0 \\ y & 0 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} a & b \\ c & d \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} ax & bx \\ ay & by \end{bmatrix}$ であるから, bx, by 必ず 0 になることは限らない. よって, I は $M_2(\mathbb{R})$ の右イデアルではない

4.3

$I = 10\mathbb{Z}, J = 15\mathbb{Z}$ であるから, $I \cap J = \{x \in \mathbb{Z} : x \in 10\mathbb{Z}, x \in 15\mathbb{Z}\} = \{x \in \mathbb{Z} : 10 \mid x, 15 \mid x\} = \{x \in \mathbb{Z} : 30 \mid x\} = 30\mathbb{Z}$ であるから, $d = 30$

$I + J = \{10a + 15b : a, b \in \mathbb{Z}\} = \{5(2a + 3b) : a, b \in \mathbb{Z}\} = 5\mathbb{Z}$ であるから, $d = 5$

$IJ = \{ab : 10 \mid a, 15 \mid b\} = \{150ab : a, b \in \mathbb{Z}\} = 150\mathbb{Z}$ であるから, $d = 150$

4.4

(1)

$1 \in I$ とすると, $\forall r \in R, r = r \cdot 1 \in I$ (イデアルだから) よって, $R \subset I$ である. また, $I \subset R$ であるから, $I = R$ である

$I = R$ とすると, I は R のイデアルであるから, $1_R \in I$

(2)

単元 $u \in I$ とすると, $\exists u^{-1} \in R, s.t. uu^{-1} = u^{-1}u = 1_R$ が成り立つ. また, I はイデアルであるから, $u \in I, u^{-1} \in R$ に対して, $uu^{-1} = u^{-1}u = 1 \in I$. (1) より, $I = R$ である

(3)

a が単元であるとする, $\exists a^{-1} \in R, s.t. aa^{-1} = a^{-1}a = 1_R$ が成り立つ. また, $1 = a^{-1}a = aa^{-1} \in (a)$ だから, (1) より, $(a) = R$

$(a) = R$ とすると, $1_R \in (a)$ であるから, $\exists r \in R, s.t. 1_R = ar = ra$ が成り立つ. よって, a は単元である

4.5

$$\forall r_1, r_2 \in A_R(I), \forall x \in I, r_1x = r_2x = 0 \implies (r_1 - r_2)x = 0 \implies r_1 - r_2 \in A_R(I)$$

$$\forall a \in R, \forall r \in A_R(I), (ar)x = a(rx) = 0 \implies ar \in A_R(I)$$

$\forall b \in R, \forall r' \in A_R(I), (r'b)x = r'(bx)$ で, I は R の左イデアルであるから, $bx = 0$. よって $r'(bx) = 0$ で, $r'b \in A_R(I)$ である

以上より, $A_R(I)$ は R の両側イデアルである

4.6

(1)

$I = (\bar{3}) = \{\bar{0}, \bar{3}, \bar{6}, \bar{9}\}$ だから, R/I の代表元は $[\bar{0}], [\bar{1}], [\bar{2}]$ である

(2)

加法表:

$$\left\{ \begin{array}{l} [\bar{0}] + [\bar{0}] = [\bar{0}] \\ [\bar{0}] + [\bar{1}] = [\bar{1}] \\ [\bar{0}] + [\bar{2}] = [\bar{2}] \end{array} \right., \left\{ \begin{array}{l} [\bar{1}] + [\bar{0}] = [\bar{1}] \\ [\bar{1}] + [\bar{1}] = [\bar{2}] \\ [\bar{1}] + [\bar{2}] = [\bar{0}] \end{array} \right., \left\{ \begin{array}{l} [\bar{2}] + [\bar{0}] = [\bar{2}] \\ [\bar{2}] + [\bar{1}] = [\bar{0}] \\ [\bar{2}] + [\bar{2}] = [\bar{1}] \end{array} \right.$$

乗法表:

$$\left\{ \begin{array}{l} [\bar{0}] \cdot [\bar{0}] = [\bar{0}] \\ [\bar{0}] \cdot [\bar{1}] = [\bar{0}] \\ [\bar{0}] \cdot [\bar{2}] = [\bar{0}] \end{array} \right., \left\{ \begin{array}{l} [\bar{1}] \cdot [\bar{0}] = [\bar{0}] \\ [\bar{1}] \cdot [\bar{1}] = [\bar{1}] \\ [\bar{1}] \cdot [\bar{2}] = [\bar{2}] \end{array} \right., \left\{ \begin{array}{l} [\bar{2}] \cdot [\bar{0}] = [\bar{0}] \\ [\bar{2}] \cdot [\bar{1}] = [\bar{2}] \\ [\bar{2}] \cdot [\bar{2}] = [\bar{1}] \end{array} \right.$$

4.7

$x^2 \equiv -1$ であるから

$$\overline{3x^4 + 2x^3 + 4x^2 - 1} = \overline{3(x^2)^2 + 2x(x^2) + 4x^2 - 1} \quad (6)$$

$$= \overline{3 \cdot (-1)^2 + 2x \cdot (-1) + 4 \cdot (-1) - 1} \quad (7)$$

$$= \overline{3 - 2x - 4 - 1} \quad (8)$$

$$= \overline{-2x - 2} \quad (9)$$

から, 次数が一番小さい $f(x)$ は $-2x - 2$

5

5.1

(1)

$\forall a_i, b_i \in \mathbb{Q}, A = a_1 + b_1\sqrt{2}, B = a_2 + b_2\sqrt{2}$

$$\phi(A+B) = \phi(a_1 + b_1\sqrt{2} + a_2 + b_2\sqrt{2}) \quad (10)$$

$$= \begin{bmatrix} a_1 + a_2 & b_1 + b_2 \\ 2(b_1 + b_2) & a_1 + a_2 \end{bmatrix} \quad (11)$$

$$\phi(A) + \phi(B) = \begin{bmatrix} a_1 & b_1 \\ 2b_1 & a_1 \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} a_2 & b_2 \\ 2b_2 & a_2 \end{bmatrix} \quad (12)$$

$$= \begin{bmatrix} a_1 + a_2 & b_1 + b_2 \\ 2(b_1 + b_2) & a_1 + a_2 \end{bmatrix} \quad (13)$$

$$\phi(AB) = \phi(a_1a_2 + 2b_1b_2 + (a_1b_2 + a_2b_1)\sqrt{2}) \quad (14)$$

$$= \begin{bmatrix} a_1a_2 + 2b_1b_2 & a_1b_2 + a_2b_1 \\ 2(a_1b_2 + a_2b_1) & a_1a_2 + 2b_1b_2 \end{bmatrix} \quad (15)$$

$$\phi(A)\phi(B) = \begin{bmatrix} a_1 & b_1 \\ 2b_1 & a_1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} a_2 & b_2 \\ 2b_2 & a_2 \end{bmatrix} \quad (16)$$

$$= \begin{bmatrix} a_1a_2 + 2b_1b_2 & a_1b_2 + a_2b_1 \\ 2(a_1b_2 + a_2b_1) & a_1a_2 + 2b_1b_2 \end{bmatrix} \quad (17)$$

$$\phi(1) = \begin{bmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{bmatrix} = 1_R \quad (18)$$

以上, ϕ は準同型である

(2)

$\forall \begin{bmatrix} a & b \\ 2b & a \end{bmatrix} \in R, a, b \in \mathbb{Q}$ であるから $q \in \mathbb{Q}[\sqrt{2}]$ により定義できるから, ϕ は前者である

$\begin{bmatrix} a & b \\ 2b & a \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} a' & b' \\ 2b' & a' \end{bmatrix}$ の (1,1) 成分と (1,2) 成分を比較すると, $a = a', b = b'$ であるから, ϕ は単射である. よって, ϕ は同型である

5.2

(1)

$\phi(x^2 - 2) = (\sqrt{2})^2 - 2 = 0$ から, $x^2 - 2 \in \text{Ker}\phi \iff (x^2 - 2) \subset \text{Ker}\phi$

逆に, $\forall f(x) \in \mathbb{Q}[x]$ を取り, $f(\sqrt{2}) = 0$. また $\mathbb{Q}[x]$ は整域であるから, $(x^2 - 2)$ で割ると $f(x) = (x^2 - 2)q(x) + r(x)$ と表せる. $\deg r(x) < 2$ から, $f(\sqrt{2}) = s + t\sqrt{2}$ と表し, $s + t\sqrt{2} = 0$ であるから, $s = t = 0$. よって, $f(x) = (x^2 - 2)q(x)$, i.e. $f(x) \in (x^2 - 2)$ から $\text{Ker}\phi \subset (x^2 - 2)$ 以上, $\text{Ker}\phi = (x^2 - 2)$

(2)

$\text{Im}\phi = \mathbb{Q}[\sqrt{2}], \text{Ker}\phi = (x^2 - 2)$ であるから, 環の準同型定理より, $\mathbb{Q}[x]/\mathbb{Q}[\sqrt{2}]$

5.3

$\phi: \mathbb{Z} \rightarrow \mathbb{Z}$ を環準同型とすると, $\phi(1) = 1$ であり, $\phi(n) = ((n-1) + 1) = \phi(n-1) + \phi(1) = \phi(n-1) + 1$ であるから, 帰納的に, $\phi(n) = n$

5.4

$\psi: \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{C}$ の環準同型が存在すると仮定すると, ψ は全単射で, $\text{Ker}\psi = \{0\}$ である. すると, $0 = \psi(0) = \psi(1+i^2) = \psi^2(i) + \psi(1) = \psi^2(i) + 1$. よって, $\psi^2(i) = -1$ で, $\psi(i) = \sqrt{-1} = i$ であるが, $i \notin \mathbb{R}$ より, この環準同型は存在しない

5.5

(1)

I は R の両側イデアルであるから,
$$\begin{cases} \forall a, b \in I, a + b \in I \\ \forall a \in I, r \in R, ra, ar \in I \end{cases}$$

ϕ は環準同型であるから,
$$\begin{cases} \phi(I) \ni \phi(a + b) = \phi(a) + \phi(b) \\ \phi(I) \ni \phi(ra) = \phi(r)\phi(a) \\ \phi(I) \ni \phi(ar) = \phi(a)\phi(r) \end{cases}$$

よって, $\phi(I)$ は R' の両側イデアルである

(2)

I' は R の両側イデアルであるから,
$$\begin{cases} \forall a', b' \in I', a' + b' \in I' \\ \forall a' \in I', r \in R', ra', a'r \in I' \end{cases}$$

ϕ は環準同型であるから,
$$\begin{cases} \phi^{-1}(I') \ni \phi^{-1}(a' + b') = \phi^{-1}(a') + \phi^{-1}(b') \\ \phi^{-1}(I') \ni \phi^{-1}(ra') = \phi^{-1}(r)\phi^{-1}(a') \\ \phi^{-1}(I') \ni \phi^{-1}(a'r) = \phi^{-1}(a')\phi^{-1}(r) \end{cases}$$

よって, $\phi^{-1}(I')$ は R の両側イデアルである

(3)

R の加法と乗法をそれぞれ \oplus, \otimes とし, S は R の部分環であるから, $\forall s_1, s_2 \in S, s_1 \oplus s_2 \in S, s_1 \otimes s_2 \in S$ が成り立ち, $1_R \in S$ である. ϕ は環準同型であるから, $\phi(s_1 \oplus s_2) = \phi(s_1) \oplus' \phi(s_2), \phi(s_1 \otimes s_2) = \phi(s_1) \otimes' \phi(s_2)$ が成り立つ. また, $\phi(1_R) = 1_{R'}$ であるから, $\phi(S)$ は R' の部分環である

(4)

R' の加法と乗法をそれぞれ \oplus', \otimes' とし, S' は R' の部分環であるから, $\forall s'_1, s'_2 \in S', s'_1 \oplus' s'_2 \in S', s'_1 \otimes' s'_2 \in S'$ が成り立ち, $1_{R'} \in S'$ である. ϕ は環準同型であるから, $\phi^{-1}(s'_1 \oplus' s'_2) = \phi^{-1}(s'_1) \oplus \phi^{-1}(s'_2), \phi^{-1}(s'_1 \otimes' s'_2) = \phi^{-1}(s'_1) \otimes \phi^{-1}(s'_2)$ が成り立つ. また, $\phi^{-1}(1_{R'}) = 1_R$ であるから, $\phi^{-1}(S')$ は R の部分環である

5.6

S は R の部分環であるから,
$$\begin{cases} \forall s_1, s_2 \in S, s_1 + s_2 \in S \\ \forall s_1, s_2 \in S, s_1 s_2 \in S \\ 1_R \in S \end{cases}$$

また, I は R の両側イデアルであるから,
$$\begin{cases} \forall a, b \in I, a + b \in I \\ \forall a \in I, r \in R, ra, ar \in I \end{cases}$$

$\forall p \in (S + I), q \in (S + I), \begin{cases} p := a_1 + x_1 & a_1 \in S, x_1 \in I \\ q := a_2 + x_2 & a_2 \in S, x_2 \in I \end{cases}$ とする

$p + q = a_1 + x_1 + a_2 + x_2 = (a_1 + a_2) + (x_1 + x_2), \begin{cases} a_1 + a_2 \in S \\ x_1 + x_2 \in I \end{cases} \implies p + q \in (S + I)$

$pq = (a_1 + x_1)(a_2 + x_2) = a_1 a_2 + a_1 x_2 + x_1 a_2 + x_1 x_2, \begin{cases} a_1 a_2 \in S \\ a_1 x_2 \in I \\ x_1 a_2 \in I \\ x_1 x_2 \in I \end{cases} \implies pq \in (S + I)$

$1_R \in S \implies 1_R \in (S + I)$

以上より, $(S + I)$ は R の部分環である

6

6.1

(1)

$$(a, b) + (c, d) = (a + c, b + d), (a, b) \cdot (c, d) = (ac, bd)$$

(2)

$$R = \left\{ \begin{bmatrix} a & 0 \\ 0 & b \end{bmatrix} : a, b \in \mathbb{Z} \right\} \subset M_2(\mathbb{R}) \text{ とする}$$

$$\begin{bmatrix} a & 0 \\ 0 & b \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} c & 0 \\ 0 & d \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} a+c & 0 \\ 0 & b+d \end{bmatrix} \quad (19)$$

$$\begin{bmatrix} a & 0 \\ 0 & b \end{bmatrix} \begin{bmatrix} c & 0 \\ 0 & d \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} ac & 0 \\ 0 & bd \end{bmatrix} \quad (20)$$

また, $\begin{bmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{bmatrix} \in R$ から R は $M_2(\mathbb{R})$ の部分環である

$\phi(a, b) = \begin{bmatrix} a & 0 \\ 0 & b \end{bmatrix}$ で定めると

$$\phi((a, b) + (c, d)) = \phi(a + c, b + d) = \begin{bmatrix} a+c & 0 \\ 0 & b+d \end{bmatrix} = \phi(a, b) + \phi(c, d) \quad (21)$$

$$\phi((a, b) \cdot (c, d)) = \phi(ac, bd) = \begin{bmatrix} ac & 0 \\ 0 & bd \end{bmatrix} = \phi(a, b) \cdot \phi(c, d) \quad (22)$$

なお, $\begin{bmatrix} a & 0 \\ 0 & b \end{bmatrix}$ は (a, b) で唯一的に表せるから, ϕ は全射であり, $\phi(a, b) = \phi(a', b')$ とすると, $a = a', b = b'$ であるから, ϕ は単射である. よって, ϕ は全単射である. 以上, $\mathbb{R} \times \mathbb{R} \cong R$

6.2

$$180 = 2^2 \cdot 3^2 \cdot 5 \text{ から, } \mathbb{Z}/180\mathbb{Z} \cong \mathbb{Z}/36\mathbb{Z} \times \mathbb{Z}/5\mathbb{Z}$$

6.3

(1)

$$\begin{cases} x_1 \equiv 0 \pmod{5\mathbb{Z}} \\ x_1 \equiv 1 \pmod{7\mathbb{Z}} \end{cases} \implies x_1 = 35k, k \in \mathbb{Z} \text{ とおき, } x_1 \equiv 1 \pmod{4\mathbb{Z}} \text{ から, } 35k \equiv 3k \equiv 1 \pmod{4\mathbb{Z}} \text{ となる. よって, } k = 3 \text{ であり, } x_1 = 105 \text{ である}$$

$$\begin{cases} x_2 \equiv 0 \pmod{4\mathbb{Z}} \\ x_2 \equiv 0 \pmod{7\mathbb{Z}} \end{cases} \implies x_2 = 28l, l \in \mathbb{Z} \text{ とおき, } x_2 \equiv 1 \pmod{5\mathbb{Z}} \text{ から. } 28l \equiv 3l \pmod{5\mathbb{Z}} \text{ となる. よって, } l = 2 \text{ であり, } x_2 = 56 \text{ である}$$

$$\begin{cases} x_3 \equiv 0 \pmod{4\mathbb{Z}} \\ x_3 \equiv 0 \pmod{5\mathbb{Z}} \end{cases} \implies x_3 = 20m, m \in \mathbb{Z} \text{ とおき, } x_3 \equiv 1 \pmod{7\mathbb{Z}} \text{ から, } 20m \equiv 6m \equiv 1 \pmod{7\mathbb{Z}} \text{ となる. よって, } m = 6 \text{ であり, } x_3 = 120 \text{ である}$$

(2)

$$x \equiv (x_1 a_1 + x_2 a_2 + x_3 a_3) \equiv \begin{cases} x_1 a_1 & (\text{mod } 4\mathbb{Z}) \\ x_2 a_2 & (\text{mod } 5\mathbb{Z}) \\ x_3 a_3 & (\text{mod } 7\mathbb{Z}) \end{cases}$$

$$\text{ここで } x_1 \equiv 1 \pmod{4\mathbb{Z}}, x_2 \equiv 1 \pmod{5\mathbb{Z}}, x_3 \equiv 1 \pmod{7\mathbb{Z}} \text{ であるから, } x \equiv \begin{cases} a_1 & (\text{mod } 4\mathbb{Z}) \\ a_2 & (\text{mod } 5\mathbb{Z}) \\ a_3 & (\text{mod } 7\mathbb{Z}) \end{cases}$$

(3)

$a_1 = 2, a_2 = 1, a_3 = 3$ のとき, $x = 2x_1 + x_2 + 3x_3$ であり, (1) より $x_1 = 105, x_2 = 56, x_3 = 120$ を代入すると

$$x = 2 \cdots 105 + 56 + 3 \cdots 120 = 210 + 56 + 360 = 626 \equiv 66 \pmod{140} \text{ から, } x = 66$$

6.4

(1)

$I = (x^2), J = ((1-x)^2)$ は $\mathbb{C}[x]$ のイデアルであるとき, $I = x^2\mathbb{C}[x], J = (1-x)^2\mathbb{C}[x]$ となるから, $IJ = \{x^2(1-x)^2 f(x) : f(x) \in \mathbb{C}[x]\} = (x^2(1-x)^2)$

(2)

$IJ = \{x^2(1-x)^2 f(x) : f(x) \in \mathbb{C}[x]\} = (x^2(1-x)^2) = I \cap J$ から, I と J が互いに素であればいい

$f(x), g(x) \in \mathbb{C}[x]$ とおき, $x^2 f(x) + (1-x)^2 g(x) = 1$ に対して, $x = 0$ のとき, $\forall f(x) \in \mathbb{C}[x], g(x) = 1$ とすれば解は常に存在する. 同様に $x = 1$ のとき, $f(x) = 1, \forall g(x) \in \mathbb{C}[x]$ とすれば解は常に存在する. それ以外の場合, $x^2 \neq 0, (1-x)^2 \neq 0$ だから, $f(x) = \frac{1}{2x^2}, g(x) =$

$\frac{1}{2(1-x)^2}$ とおけば, $x^2 f(x) + (1-x)^2 g(x) = 1$ は常に解があるので, I と J は互いに素である.

よって, $\mathbb{C}[x] / (x^2(1-x)^2) \cong \mathbb{C}[x] / (x^2) \times \mathbb{C}[x] / ((1-x)^2)$

7

7.1

(1)

(⇒)

$n\mathbb{Z}$ が素イデアルとすると, $\mathbb{Z}/n\mathbb{Z}$ は整域である. したがって, n は素数または 0 である
 $\mathbb{Z}/n\mathbb{Z}$ を整域とすると, $\forall a, b \in \mathbb{Z}/n\mathbb{Z}, ab = 0$ ならば, 零因子は 0 のみである. もし n は素数でない
と仮定すると, $\exists u, v \in \mathbb{Z}, s.t. n = uv$ で, $\bar{u}, \bar{v} \in \mathbb{Z}/n\mathbb{Z}, \bar{u}\bar{v} = \overline{uv} = \bar{0}$ から, 共に零因子になる
ので, 矛盾する

n は正の整数だから, $n \neq 0$ で, 素数である

(⇐)

n が素数であるとすると, $\mathbb{Z}/n\mathbb{Z}$ は聖域になるから, $n\mathbb{Z}$ は素イデアルである

(2)

(⇒)

$n\mathbb{Z}$ を極大イデアルとすると, $\mathbb{Z}/n\mathbb{Z}$ が体になり, 整域にもなる (なぜなら $n\mathbb{Z} \ni a, b \neq 0, ab = 0$
で, 両辺に左から a^{-1} をかけると, $b = 0$ となり, 零因子は 0 のみである). すると $n\mathbb{Z}$ は素イ
デアルである

(⇐)

$n\mathbb{Z}$ が素イデアルであると仮定すると, $\mathbb{Z}/n\mathbb{Z}$ は整域である. また, (1) より, n は素数である
から, $\mathbb{Z}/n\mathbb{Z}$ は体になる. よって, $n\mathbb{Z}$ は極大イデアルである

(3)

$0\mathbb{Z} = \{0\}$ に対して, $\forall z \in \mathbb{Z}, 0z = z0 = 0 \in 0\mathbb{Z}$ であるから, イデアルである. また, $\forall a, b \in \mathbb{Z}, ab \in 0\mathbb{Z}$ とすると, $ab = 0$ で, 少なくとも一方が 0 であるから, a または b は $0\mathbb{Z}$ に属して
いる. よって, $0\mathbb{Z}$ は素イデアルである

7.2

(1)

$\mathbb{R}[x] \ni f(x) = a_0 + a_1x + a_2x^2 + \dots + a_nx^n$ に対して, $\phi(f(x)) = f(0) = a_0$ をみたす写像 ϕ
を考える. $\forall f, g \in \mathbb{R}[x], \phi(f(x) + g(x)) = f(0) + g(0) = \phi(f(x)) + \phi(g(x)), \phi(f(x)g(x)) =$
 $f(0)g(0) = \phi(f(x))\phi(g(x))$ ので, ϕ は環準同型である

$\text{Ker}\phi = \{f(x) \in \mathbb{R}[x] : \phi(f(x)) = 0\} = \{f(x) \in \mathbb{R}[x] : f(0) = 0\}$ だから, $a_0 = 0$ で, $f(x) =$
 $a_1x + a_2x^2 + \dots + a_nx^n \ni (x)$ で, $\text{Ker}\phi = (x)$. また, $\text{Im}\phi = \{\phi(f(x)) : f(x) \in \mathbb{R}[x]\}$ から,
 $\phi(f(x)) = f(0) = a_0$ より, $\text{Im}\phi = \mathbb{R}$

以上, 準同型定理より, $\mathbb{R}/(x) \cong \mathbb{R}$ であるから, 体である. よって, (x) は極大イデアルである

(2)

$(x^2 - 1)$ が極大イデアルであることと仮定すると, $(x^2 - 1)$ を含むイデアルは $(x^2 - 1)$ と $\mathbb{R}[x]$
しかないが, $x^2 - 1 = (x - 1)(x + 1)$ であるから, $(x - 1) \ni f(x) \notin (x^2 - 1)$ を満たす $f(x)$ が
存在するから, $(x^2 - 1) \subsetneq (x - 1)$ で, $(x - 1)$ も $\mathbb{R}[x]$ のイデアルだから, $(x^2 - 1)$ の極大と矛盾する.
よって, $(x^2 - 1)$ は極大イデアルでない

(3)

(1)と同様に,写像 $\psi: \mathbb{R}[x] \rightarrow \mathbb{R}[i]$ を $\psi(f(x)) = f(i)$ と定める. $\forall f, g \in \mathbb{R}[x], \psi(f(x) + g(x)) = f(i) + g(i) = \psi(f(x)) + \psi(g(x))$ から, ψ は準同型である

$\text{Ker}\psi = \{f(x) \in \mathbb{R}[x] : \psi(f(x)) = 0\} = \{f(x) \in \mathbb{R}[x] : f(i) = 0\} = (x^2 - 1)$ で, $\text{Im}\psi = \{\psi(f(x)) \in \mathbb{R}[i] : f(x) \in \mathbb{R}[x]\} = \{f(i) : f(x) \in \mathbb{R}[x]\} = \mathbb{R}[i] = \mathbb{C}$ であるから, 準同型定理より, $\mathbb{R}[x]/(x^2 + 1) \cong \mathbb{C}$ であり, \mathbb{C} は体であるから, $\mathbb{R}[x]/(x^2 - 1)$ も体となり, $(x^2 + 1)$ は極大イデアルである

7.3

(1)

(x) は $\mathbb{Z}[x]$ の素イデアル $\iff \mathbb{Z}[x]/(x)$ は整域であるから, 写像 $\phi: \mathbb{Z}[x] \rightarrow \mathbb{Z}$ を $\phi(f(x)) = f(0) = a_0$ とすると, $\forall f, g \in \mathbb{Z}[x], \phi(f(x) + g(x)) = \phi(a_0 + b_0 + (a_1 + b_1)x + \dots) = a_0 + b_0 = f(0) + g(0) = \phi(f(x)) + \phi(g(x))$ であり, $\phi(f(x)g(x)) = \phi(a_0b_0 + (a_0b_1 + a_1b_0)x + \dots) = a_0b_0 = \phi(f(x))\phi(g(x))$ から, ϕ は準同型である

$\text{Ker}\phi = \{f(x) \in \mathbb{Z}[x] : \phi(f(x)) = 0\} = \{f(x) \in \mathbb{Z}[x] : f(0) = 0\}$ だから, $a_0 = 0$ で, $f(x) = a_1x + a_2x^2 + \dots + a_nx^n \in (x)$ から, $\text{Ker}\phi = (x)$. また, $\text{Im}\phi = \{\phi(f(x)) : f(x) \in \mathbb{Z}[x]\} = \{a_0 \in \mathbb{Z} : f(x) \in \mathbb{Z}[x]\} = \mathbb{Z}$ であるから, 準同型定理より, $\mathbb{Z}[x]/(x) \cong \mathbb{Z}$ から, $\mathbb{Z}[x]/(x)$ は整域である. よって, (x) は素イデアルである

なお, \mathbb{Z} は体ではないから, $\mathbb{Z}[x]/(x)$ も体ではない. よって, (x) は極大イデアルではない

(2)

$(2, x) = \{g(x) \cdot 2 + h(x) \cdot x : g(x), h(x) \in \mathbb{Z}[x]\}$ とする. $\forall f(x) \in (2, x), f(x) = g(x) \cdot 2 + h(x) \cdot x$ で, $x = 0$ を代入すると, $f(0) = 2g(0)$ となる. $g(0) \in \mathbb{Z}$ だから, $f(0) \in 2\mathbb{Z}$. 逆に, $f(0) \in 2\mathbb{Z}$ とすると, $\forall k \in \mathbb{Z}, f(x) = a_nx^n + a_{n-1}x^{n-1} + \dots + a_1x + 2k = (a_nx^{n-1} + a_{n-1}x^{n-2} + \dots + a_1)x + 2k$ とかけるから, $g(x) = k, h(x) = a_nx^{n-1} + a_{n-1}x^{n-2} + \dots + a_1$ とすれば, $f(x) = g(x) \cdot 2 + h(x) \cdot x$ となり, $f(x) \in (2, x)$

また, $\forall f(x) \in (x), f(0) = 0 \in 2\mathbb{Z} \implies f(x) \in (2, x)$ であり, $g(x) = k \in \mathbb{Z}$ とすれば, $2g(x) + xh(x) = a_nx^n + \dots + a_1x + 2k$ であるから, $2g(x) + xh(x) \notin (x)$ になる. $(x) \subsetneq (2, x)$ $\forall f(x) \in (2, x), f(x) = 2g(x) + xh(x) = a_nx^n + \dots + a_1x + 2k$ であるから, $f(x) \in \mathbb{Z}[x]$ が, $f'(x) = a_nx^n + \dots + a_1x + 2k + 1$ とすれば, $\mathbb{Z}[x] \ni f'(x) \notin (2, x)$. よって, $(2, x) \subsetneq \mathbb{Z}[x]$

(3)

$(2, x)$ は極大イデアル $\iff \mathbb{Z}[x]/(2, x)$ は体であるから, 写像 $\psi: \mathbb{Z}[x] \rightarrow \mathbb{Z}/2\mathbb{Z}$ を $\psi(f(x)) :=$

$$\overline{f(0)} = \begin{cases} 0 & f(0) \equiv 0 \pmod{2} \\ 1 & f(0) \equiv 1 \pmod{2} \end{cases} \text{ と定める. すると, } \forall f, g \in \mathbb{Z}[x]$$

$$\psi(f(x) + g(x)) = \psi(a_nx^n + \dots + a_1x + a_0 + b_mx^m + \dots + b_1x + b_0) \quad (23)$$

$$= \overline{a_0 + b_0} = \overline{a_0} + \overline{b_0} \quad (24)$$

$$= \psi(f(x)) + \psi(g(x)) \quad (25)$$

$$\psi(f(x)g(x)) = \psi((a_nx^n + \dots + a_1x + a_0)(b_mx^m + \dots + b_1x + b_0)) \quad (26)$$

$$= \overline{a_0b_0} = \overline{a_0} \cdot \overline{b_0} \quad (27)$$

$$= \psi(f(x))\psi(g(x)) \quad (28)$$

であるから, ψ は準同型である

$$\text{Ker}\psi = \{f(x) \in \mathbb{Z}[x] : \psi(f(x)) = \bar{0}\} \quad (29)$$

$$= \{f(x) = 2(a_0 + a_1x + a_2x^2 + \cdots + a_nx^n) + x(b_0 + b_1x + b_2x^2 + \cdots + b_mx^m)\} \quad (30)$$

$$= (2, x) \quad (31)$$

$$\text{Im}\psi = \{\psi(f(x)) : f(x) \in \mathbb{Z}[x]\} \quad (32)$$

$$= \{\bar{0}, \bar{1}\} = \mathbb{Z}/2\mathbb{Z} \quad (33)$$

から, 準同型定理より, $\mathbb{Z}[x]/(2, x) \cong \mathbb{Z}/2\mathbb{Z}$ で, $\mathbb{Z}/2\mathbb{Z}$ は体であるから, $\mathbb{Z}[x]/(2, x)$ も体で, $(2, x)$ は極大イデアルである

7.4

(1)

$$I = (2, \sqrt{10}) \quad (34)$$

$$= \{2(a + b\sqrt{10}) + \sqrt{10}(c + d\sqrt{10}) : a, b, c, d \in \mathbb{Z}\} \quad (35)$$

$$= \{2(a + 5d) + \sqrt{10}(2b + c) : a, b, c, d \in \mathbb{Z}\} \quad (36)$$

$$= \{2a + b\sqrt{10} : a, b \in \mathbb{Z}\} \quad (37)$$

(2)

I が素イデアル $\iff R/I$ が整域であるから

写像 $\phi : R \rightarrow \mathbb{Z}/2\mathbb{Z}$ を $\phi(a + b\sqrt{10}) = \begin{cases} \bar{0} & a \equiv 0 \pmod{2} \\ \bar{1} & a \equiv 1 \pmod{2} \end{cases}$ と定める. すると $\forall a, b, c, d \in \mathbb{Z}$

$$\phi\left(\left(a + b\sqrt{10}\right) + \left(c + d\sqrt{10}\right)\right) = \phi\left(\left(a + c\right) + \left(b + d\right)\sqrt{10}\right) \quad (38)$$

$$= \overline{a + c} = \bar{a} + \bar{c} \quad (39)$$

$$= \phi\left(a + b\sqrt{10}\right) + \phi\left(c + d\sqrt{10}\right) \quad (40)$$

$$\phi\left(\left(a + b\sqrt{10}\right)\left(c + d\sqrt{10}\right)\right) = \phi\left(\left(ac + 10bd\right) + \left(ad + bc\right)\sqrt{10}\right) \quad (41)$$

$$= \overline{ac + 10bd} = \bar{a} \cdot \bar{c} \quad 10bd \equiv 0 \pmod{2} \quad (42)$$

$$= \phi\left(a + b\sqrt{10}\right)\phi\left(c + d\sqrt{10}\right) \quad (43)$$

よって, ϕ は準同型である

$$\text{Ker}\phi = \{a + b\sqrt{10} \in R : \phi(a + b\sqrt{10}) = \bar{0}\} \quad (44)$$

$$= \{a + b\sqrt{10} \in R : a \equiv 0 \pmod{2}\} \quad (45)$$

$$= \{2k + b\sqrt{10} : k, b \in \mathbb{Z}\} = I \quad (46)$$

$$\text{Im}\phi = \{\phi(a + b\sqrt{10}) : a, b \in \mathbb{Z}\} \quad (47)$$

$$= \{\bar{0}, \bar{1}\} = \mathbb{Z}/2\mathbb{Z} \quad (48)$$

から, 準同型より, $R/I \cong \mathbb{Z}/2\mathbb{Z}$ である. $\mathbb{Z}/2\mathbb{Z}$ は整域であるから, R/I も整域であり, I は素イデアルである

7.5

$I \cap J$ は素イデアルではない $\iff \forall a, b \in R, (ab \in I \cap J \implies a \in I \cap J \vee b \in I \cap J)$ で、対偶から考えると、 $\exists a, b \in R, s.t. (a \notin I \cap J \wedge b \notin I \cap J \implies ab \in I \cap J)$ を証明すればいい
 I, J はイデアルであるから、 $a \in I$ に対して、 $\forall b \in R, ab \in I$. 同様に、 $b \in J, ab \in J$. よって、 $ab \in I \cap J$. ここで、 $I \not\subseteq J$ かつ $J \not\subseteq I$ であるから、 $a \in I \setminus (I \cap J), b \in J \setminus (I \cap J)$ が存在する. よって、 $I \cap J$ は素イデアルではない

8

8.1

(1)

$b|a$ とすると, $\exists c \in R, s.t. a = bc$ であるから, $(a) \ni x = ra = rbc = (rc)b$ であるから, $(a) \subseteq (b)$.
 逆に $(a) \subseteq (b)$ とすると, $a \in (a) \subseteq (b) \implies a \in \{tb : t \in R\}$ となるから, $\exists t \in R, s.t. a = bt$ で,
 $b|a$ である. 以上, $b|a \iff (a) \subseteq (b)$

(2)

$a \approx b$ とすると, $\exists u \in R^\times, s.t. a = bu$ で, $b|a$. また, R は整域であるから, $\exists u^{-1} \in R^\times, s.t. u^{-1}u = uu^{-1} = 1$

$a = bu$ の両辺に右から u^{-1} をかけると, $au^{-1} = b$ だから, $a|b$

(1) より, $(a) \subseteq (b)$ かつ $(b) \subseteq (a)$ で, $(a) = (b)$

逆に, $(a) = (b)$ とすると, $(a) \subseteq (b)$ かつ $(b) \subseteq (a)$ で, (1) より, $b|a$ かつ $a|b$ である. これは
 $\exists c, d \in R, s.t. a = bc, b = ad \implies a = (ad)c = a(dc) \implies dc = 1$ よって, $a \approx b$

8.2

$u \in \mathbb{Z}^\times$ であるから, $uu^{-1} = u^{-1}u = 1$ で, $u = \pm 1$. すると, $a \approx b$ となる $b \in \mathbb{Z}$ は $b = \pm a$. また,
 $a = 0$ のとき, $b = \pm a = 0$

8.3

(1)

$u = a + b\sqrt{-5}$ の逆元 $v = c + d\sqrt{-5}$ と定義すると, $uv = (a + b\sqrt{-5})(c + d\sqrt{-5}) = 1$

よって,
$$\begin{cases} ac - 5bd = 1 \\ ad + bc = 0 \end{cases}$$

1. $b = 0$ のとき, $\begin{cases} ac = 1 \\ ad = 0 \end{cases}$ で, $a, b, c, d \in \mathbb{Z}$ であるから, $a = \pm 1, c = \mp 1, b = d = 0$

2. $b \neq 0$ のとき, $c = -\frac{ad}{b}$ で, $-d\left(\frac{a^2}{b} + 5b\right) = 1$ となり, $d \neq 0$. また, $c \in \mathbb{Z}$ から, $b = \pm 1$
 となる. すると $\left|\frac{a^2}{b} + 5b\right| \geq 5$ となるから, $-d\left(\frac{a^2}{b} + 5b\right) = 1$ をみたす $d \in \mathbb{Z}$ は存在
 しない

よって, $b = d = 0, a = \pm 1, c = \mp 1$. つまり, $\mathbb{Z}[\sqrt{-5}]$ のすべての単元は ± 1 である

(2)

$u, v \in \mathbb{Z}[\sqrt{-5}], uv = 3$ とすると,
$$\begin{cases} ac - 5bd = 3 \\ ad + bc = 0 \end{cases}$$

(1) の討論より, $b = 0$ の場合しか成り立てないから, $b = d = 0, \begin{cases} a = \pm 1 \\ c = \pm 3 \end{cases}$ または $\begin{cases} a = \pm 3 \\ c = \pm 1 \end{cases}$.

言い換えれば, u, v の中で必ず一方が単元 ± 1 である. よって, 3 は既約元である

(3)

$u, v \in \mathbb{Z}[\sqrt{-5}]$, $uv = 2 + \sqrt{-5}$ とすると, $\begin{cases} ac - 5bd = 2 \\ ad + bc = 1 \end{cases} \implies c - 2d = \pm(5d + 2c)$ で, $a = b \frac{5d + 2c}{c - 2d}$ を考えると, $a = 3b$ となり, $LHS = 3RHS$ で矛盾する. よって, $2 + \sqrt{-5}$ は既約元である. $2 - \sqrt{-5}$ も同じ考えであるから略

(4)

$3 \cdot 3 = 9 = (2 + \sqrt{-5})(2 - \sqrt{-5})$ であるから, $9 \in (3)$ であるが, $2 + \sqrt{-5} \notin (3)$, $2 - \sqrt{-5} \notin (3)$ から, 素イデアルの定義より, (3) は素イデアルではない

(5)

$9 \in \mathbb{Z}[\sqrt{-5}]$ で, (2)(3) より, 既約分解は $3 \cdot 3$ または $(2 + \sqrt{-5})(2 - \sqrt{-5})$ である. すると, R は UFD であるなら, $3 \approx (2 \pm \sqrt{-5})$ をみたせばいいが, (1) より, 単元は ± 1 しかないから, $(2 \pm \sqrt{-5}) \cdot (\pm 1) \neq 3$ より, $3 \not\approx (2 \pm \sqrt{-5})$ である. よって, R は UFD ではない

(6)

(2)(3) より, $3 \cdot 3 = 9 = (2 + \sqrt{-5})(2 - \sqrt{-5})$

8.4

(1)

$u = a + bi$ と逆元 $v = c + di$ を定義すると, $uv = 1$ となり, $\begin{cases} ac - bd = 1 \\ ad + bc = 0 \end{cases}$

$$1. \ b = 0 \text{ のとき, } \begin{cases} ac = 1 \\ ad = 0 \end{cases} \implies a = \pm 1, c = \pm 1, b = d = 0$$

$$2. \ b \neq 0 \text{ のとき, } c = -\frac{ad}{b} \text{ で, } -d \left(\frac{a^2}{b} + b \right) = 1 \text{ となり, } d \neq 0$$

また, $c \in \mathbb{Z}$ から, $b = \pm 1$ となる. また, $\left| \frac{a^2}{b} + b \right|$ は $a \neq 0$ のとき 1 より大きいであるから, $a = c = 0$

以上, $u = \pm 1$ または $\pm i$

(2)

$$2 = (a + bi)(c + di) \text{ とすると } 4 = |2|^2 = |a + bi|^2 |c + di|^2 = (a^2 + b^2)(c^2 + d^2) = \begin{cases} 1 \cdot 4 \\ 2 \cdot 2 \\ 4 \cdot 1 \end{cases}$$

1. $a^2 + b^2 = 1$ のとき, $(a, b) = (\pm 1, 0), (0, \pm i)$ で, 単元である

2. $a^2 + b^2 = 2$ のとき, $a, b, c, d = \pm 1$ で, $2 = (1 + i)(1 - i)$ で, $1 + i, 1 - i \notin \mathbb{R}^\times$ より既約元ではない

(3)

$$3 = (a + bi)(c + di) \text{ とすると, } 9 = (a^2 + b^2)(c^2 + d^2) = \begin{cases} 1 \cdot 9 \\ 3 \cdot 3 \\ 9 \cdot 1 \end{cases}$$

$a^2 + b^2 = 1, c^2 + d^2 = 9$ とすると, $\begin{cases} a = \pm 1 \\ b = 0 \end{cases}$ または $\begin{cases} a = 0 \\ b = \pm 1 \end{cases}$ で, $3 = (\pm 1)(c + di) = (\pm 1)(\pm 3)$
または $3 = (\pm i)(c + di) = (\pm i)(\mp 3i)$ しか分解できない. $\pm 1, \pm i$ は単元であるから, 3 は既約元である

9

9.1

(1)

$\gamma = a + b\sqrt{-2}, \gamma' = p + q\sqrt{-2}$ とすると, 仮定より, $\begin{cases} |p - a| \leq \frac{1}{2} \\ |q - b| \leq \frac{1}{2} \end{cases}$. すると

$$N(\gamma' - \gamma) = N((p - a) + (q - b)\sqrt{-2}) \quad (49)$$

$$= (p - a)^2 + 2(q - b)^2 \quad (50)$$

$$\leq \frac{1}{4} + 2 \cdot \frac{1}{4} = \frac{3}{4} < 1 \quad (51)$$

(2)

$R = \mathbb{Z}[\sqrt{-2}]$ がユークリッド整域であるなら, $\forall \alpha, \beta \in R, \exists q, r \in R, s.t. \alpha = \beta q + r$ で, $r = 0$ または $N(r) < N(\beta)$ である. $\mathbb{Q}[\sqrt{-2}]$ で $\frac{\alpha}{\beta}$ を考えると, $\frac{\alpha}{\beta} = u + v\sqrt{-2}$ ($u, v \in \mathbb{Q}$) が書け,

(1) より, $\exists m, n \in \mathbb{Z}, s.t. |u - m| < \frac{1}{2}, |v - n| < \frac{1}{2}$ から, $q = m + n\sqrt{-2}$ とおき, $r = \alpha - \beta q$ となり, $r = 0$ または $N(r) < N(\beta)$ をみたせばいい

$$N(r) = N\left(\beta\left(\frac{\alpha}{\beta} - q\right)\right) \quad (52)$$

$$= N(\beta)N\left(\frac{\alpha}{\beta} - q\right) \quad (53)$$

$$= N(\beta)N[(u - m) + (v - n)\sqrt{-2}] \quad (54)$$

$$= N(\beta)\left((u - m)^2 + 2(v - n)^2\right) \quad (55)$$

$$< N(\beta)\left(\frac{1}{4} + 2 \cdot \frac{1}{4}\right) \quad (56)$$

$$= \frac{3}{4}N(\beta) < N(\beta) \quad (57)$$

よって, $R = \mathbb{Z}[\sqrt{-2}]$ はユークリッド整域である

9.2

$\omega = \frac{-1 + \sqrt{-3}}{2}$ は $x^2 + x + 1 = 0$ の解であり, $\bar{\omega} = \omega^2$ なので

$$N(a + b\omega) = (a + b\omega)(a + b\omega^2) \quad (58)$$

$$= a^2 + ab(\omega + \omega^2) + b^2\omega^3 \quad (59)$$

$$= a^2 - ab + b^2 \quad (60)$$

と $N(a + b\omega) = a^2 - ab + b^2$ と定義する ($\mathbb{Q}[\omega]$ 上)

$\forall \alpha, \beta \in R := \mathbb{Z}[\omega], \exists q, r \in R, s.t. \alpha = \beta q + r$ で, $r = 0$ または $N(r) < N(\beta)$ を示す

$\frac{\alpha}{\beta} = u + v\omega$ ($u, v \in \mathbb{Q}$) とすると, $\exists m, n \in \mathbb{Z}, s.t. |u - m| < \frac{1}{2}, |v - n| < \frac{1}{2}$ から, $q := m + n\omega$

とおき, $r = \alpha - \beta q$ となり, $r = 0$ または $N(r) < N(\beta)$ をみたせばいい

$$N(r) = N\left(\beta\left(\frac{\alpha}{\beta} - q\right)\right) \quad (61)$$

$$= N(\beta) N\left(\frac{\alpha}{\beta} - q\right) \quad (62)$$

ここで, $\epsilon_x := x - m, \epsilon_y := y - n$ とすると

$$N(r) = N(\beta) N\left(\frac{\alpha}{\beta} - q\right) \quad (63)$$

$$= N(\beta) N(\epsilon_x + \epsilon_y \omega) \quad (64)$$

$$= N(\beta) (\epsilon_x^2 - \epsilon_x \epsilon_y + \epsilon_y^2) \quad (65)$$

$$< N(\beta) \left(\frac{1}{4} + \frac{1}{4} + \frac{1}{4}\right) \quad (66)$$

$$= \frac{3}{4} N(\beta) < N(\beta) \quad (67)$$

9.3

F を体とすると, $\forall a \in F, \exists a^{-1} \in F, s.t. aa^{-1} = a^{-1}a = 1$ であるから. $\forall a, b \in F, q := b^{-1}a$ とすれば, $a = bb^{-1}a = b(b^{-1}a) = bq$ ($+0$) であるから, 写像 $N(x) = 1$ とすればいい

9.4

(1)

$(a, b) = (d)$ とすると, $(a) \subseteq (a, b), (b) \subseteq (a, b)$ であるから, $(a) \subseteq (d), (b) \subseteq (d)$ となり, $d|a, d|b$ である. よって, d は a, b の公約元である. c も a, b の公約元であると仮定すると, $(a) \subseteq (c)$ かつ $(b) \subseteq (c)$ である. すると, $(d) = (a, b) \subseteq (c)$ となるから, $c|d$ である. 以上より, d は a, b の最大公約元である

(2)

$(a) \cap (b) = (m)$ とすると, $(m) \subseteq (a)$ かつ $(m) \subseteq (b)$ となり, m は a, b の公倍数元である. n も a, b の公倍数元であると仮定すると, $(n) \subseteq (a)$ かつ $(n) \subseteq (b)$ である. すると, $(n) \subseteq (a) \cap (b) = (m)$ から, $m|n$ となる. よって, m は a, b の最小公倍数元である

(3)

d は a, b の最大公約元であるから, $\exists x, y \in R, s.t. d = xa + yb$ で, 両辺に m をかけると, $dm = xam + ybm$ となる. また, m は a, b の最小公倍数元であるから, $\exists s, t \in R, s.t. m = sa = tb$ で

$$dm = xam + ybm \quad (68)$$

$$= xa(tb) + yb(sa) \quad (69)$$

$$= xtab + ysab = (xt + ys)ab \quad (70)$$

から, $ab|dm$ で, $(dm) \subseteq (ab)$

逆に, d は a, b の最大公約元であるから, $d|a, d|b$ で, $\frac{ab}{d}$ は a, b の公倍数元であり, m は a, b の最小公倍数元であるから, $m|\frac{ab}{d}$ で, $\exists k \in R, s.t. \frac{ab}{d} = mk$ となる. 両辺に d をかけると, $ab = dm k$ で, $dm|ab$ があるから, $(ab) \subseteq (dm)$
以上より, $(ab) = (dm)$

9.5

$(2, x)$ が単項イデアルであると仮定すると, $\exists f(x) \in \mathbb{Z}[x], s.t. (2, x) = (f(x))$

$2 \in (2, x) = (f(x))$ より, $f(x) | 2$ で, $f(x) \in \{\pm 1, \pm 2\}$

同様に, $x \in (2, x) = (f(x))$ から, $f(x) | x$ が成り立つ. しかし, $\pm 2 \nmid x$ であるから, $f(x) \in \{\pm 1\}$ となるが, $f(x) = \pm 1$ とすると, $(f(x)) = \mathbb{Z}[x]$ で, $2f(x) + xg(x) \in (2, x)$ の定数項は必ず偶数であるが, $\mathbb{Z}[x]$ の中に定数項が奇数である多項式が存在するので, 矛盾する. よって, $(2, x)$ は単項イデアルではない

9.6

$$\begin{pmatrix} x^4 + 2x^3 + 5x + 2 \\ x^4 + x^3 - 3x^2 + 4x + 2 \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} x^3 + 3x^2 + x \\ x^4 + x^3 - 3x^2 + 4x + 2 \end{pmatrix} \quad (71)$$

$$\rightarrow \begin{pmatrix} x^3 + 3x^2 + x \\ 2x^2 + 6x + 2 \end{pmatrix} \quad (72)$$

$$\rightarrow \begin{pmatrix} x^2 + 3x + 1 \\ 0 \end{pmatrix} \quad (73)$$

から, 最大公約元は $x^2 + 3x + 1$

10

10.1

包含写像 $\phi: \mathbb{Z} \rightarrow \mathbb{Q}$ を $\phi(x) = x$ と定めると、 ϕ は明らかに単射である。また、 $\forall a, b, c, d \in \mathbb{Z}, b, d \neq 0, x = \frac{a}{b} + \frac{c}{d}\sqrt{2} \in \mathbb{Q}[\sqrt{2}]$ で

$$x = \frac{a}{b} + \frac{c}{d}\sqrt{2} \quad (74)$$

$$= \frac{ad + bc\sqrt{2}}{bd} \quad (75)$$

$$= \phi(ad + bc\sqrt{2}) \phi(bd)^{-1} \quad (76)$$

から、 $\mathbb{Q}[\sqrt{2}]$ は $\mathbb{Z}[\sqrt{2}]$ の商体である

10.2

$\phi: K \rightarrow K$ を $\phi(x) = x$ と定めると、 ϕ は明らかに単射である。また、 $x = \phi(x) = \phi(x)\phi(1)^{-1}$ であることを注意すると、 K の商体は K 自身である

10.3

(1)

$0 = \frac{0}{1}, 1 = \frac{1}{1}, (p, 1) = 1$ であることを注意すると、 $0, 1 \in \mathbb{Z}_{(p)}$

$\forall \frac{m}{n}, \frac{m'}{n'} \in \mathbb{Z}_{(p)}, (p, n) = (p, n') = 1$ で

$$\frac{m}{n} + \frac{m'}{n'} = \frac{mn' + m'n}{nn'} \in \mathbb{Z}_{(p)} \quad (p, nn') = 1 \quad (77)$$

$$\frac{m}{n} \cdot \frac{m'}{n'} = \frac{mm'}{nn'} \in \mathbb{Z}_{(p)} \quad (p, nn') = 1 \quad (78)$$

また、 $\frac{m}{n} \in \mathbb{Z}_{(p)}$ の加法に関する逆元は $-\frac{m}{n} = \frac{-m}{n} \in \mathbb{Z}_{(p)}$ であり、 $\frac{m}{n} \in \mathbb{Z}_{(p)}$ から、 $(p, n) = 1$

より、 $\frac{-m}{n} \in \mathbb{Z}_{(p)}$

以上より、 $\mathbb{Z}_{(p)}$ は \mathbb{Q} の部分環である

(2)

包含写像 $\phi: \mathbb{Z}_{(p)} \rightarrow \mathbb{Q}$ を $\phi(x) = x$ と定め、 ϕ は明らかに単射で、 $n = 1$ とすると、 $(p, n) = 1$ で

$$\phi(a)(b)^{-1} = \frac{a}{1} \cdot \frac{1}{b} \quad (79)$$

$$= \frac{a}{b} \quad (80)$$

とかけるから、 $\mathbb{Z}_{(p)}$ の商体は \mathbb{Q} である

11

11.1

(1)

$$x^2 + \bar{1} = x^2 + \bar{0}x + \bar{1} = x^2 + \bar{2}x + \bar{1} = (x + \bar{1})(x + \bar{1}) \quad (81)$$

より, 既約でない

(2)

$$\bar{0}, \bar{1}, \bar{2} \text{ をそれぞれ代入すると, } \begin{cases} x^2 + \bar{1} = \bar{1} & x = \bar{0} \\ x^2 + \bar{1} = \bar{2} & x = \bar{1} \text{ となり, } \bar{0} \text{ にならない} \\ x^2 + \bar{1} = \bar{2} & x = \bar{2} \end{cases}$$

よって, $x^2 + \bar{1}$ は $(\mathbb{Z}/3\mathbb{Z})[x]$ で既約である

(3)

$\bar{1}^3 + \bar{2} = \bar{3} = \bar{0}$ であることを注意すると, $x^3 + \bar{2} = (x - \bar{1})(x^2 + x + \bar{1})$ と分解できるから, 既約でない

11.2

$f(x) = x^3 - x - 2$ が $(\mathbb{Z}/5\mathbb{Z})[x]$ で可約であると仮定すると, $\exists a \in \mathbb{Z}/5\mathbb{Z}, s.t. x = a$ は $x^3 - x - 2$ の根である. $\bar{0}, \bar{1}, \bar{2}, \bar{3}, \bar{4}$ をそれぞれ代入すると

$$\begin{cases} x^3 - x - 2 = \bar{3} & x = \bar{0} \\ x^3 - x - 2 = \bar{3} & x = \bar{1} \\ x^3 - x - 2 = \bar{4} & x = \bar{2} \\ x^3 - x - 2 = \bar{2} & x = \bar{3} \\ x^3 - x - 2 = \bar{3} & x = \bar{4} \end{cases} \quad (82)$$

となるから, 根が存在しない. よって, $f(x) = x^3 - x - 2$ は $(\mathbb{Z}/5\mathbb{Z})[x]$ で既約である

11.3

(1)

$f(x) = x^4 - x - 3$ が $g(x) = x + a, h(x) = x^3 + bx^2 + cx + d$ と分解できると仮定すると

$$f(x) = (x + a)(x^3 + bx^2 + cx + d) \quad (83)$$

$$= x^4 + (a + b)x^3 + (ab + c)x^2 + (ac + d)x + ad \quad (84)$$

$$= x^4 - x - 3 \quad (85)$$

$$\text{から, } \begin{cases} a+b=0 \\ ab+c=0 \\ ac+d=-1 \\ ad=-3 \end{cases} \text{ となり, } a \in \mathbb{Z} \text{ より, } a = \pm 1, \pm 3$$

$\pm 1, \pm 3$ をそれぞれ代入すると

$$f(1) = -3 \quad (86)$$

$$f(-1) = -1 \quad (87)$$

$$f(3) = 75 \quad (88)$$

$$f(-3) = 81 \quad (89)$$

で, いずれも 0 にならないから, 根が存在しない. よって, $f(x)$ は $\mathbb{Z}[x]$ で既約である

(2)

$f(x) = x^4 - x - 3$ が $g(x) = x^2 + ax + b$ と $h(x) = x^2 + cx + d$ と分解できると仮定すると

$$f(x) = (x^2 + ax + b)(x^2 + cx + d) \quad (90)$$

$$= x^4 + (a+c)x^3 + (ac+b+d)x^2 + (ad+bc)x + bd \quad (91)$$

$$= x^4 - x - 3 \quad (92)$$

$$\text{から, } \begin{cases} a+c=0 \\ ac+b+d=0 \\ ad+bc=-1 \\ bd=-3 \end{cases} \implies (b,d) = (1,-3), (-1,3), (3,-1), (-3,1) \implies b+d = \pm 2$$

$\begin{cases} ac = -b - d = \mp 2 \\ a = -c \end{cases}$ より, $a^2 = \pm 2$ となり, いずれも $a \in \mathbb{Z}$ を満たさない. よって, $f(x)$ は $\mathbb{Z}[x]$ で既約である

(3)

(1)(2) より, $f(x)$ は $\mathbb{Z}[x]$ で既約で, $\mathbb{Q}[x]$ は $\mathbb{Z}[x]$ の商体であるから, $f(x)$ は $\mathbb{Q}[x]$ でも既約である

11.4

$(\mathbb{Z}/2\mathbb{Z})[x]$ での 2 次多項式は $\begin{cases} x^2 + \bar{0}x + \bar{0} \\ x^2 + \bar{0}x + \bar{1} \\ x^2 + \bar{1}x + \bar{0} \\ x^2 + \bar{1}x + \bar{1} \end{cases}$ であり, $\mathbb{Z}/2\mathbb{Z}$ で根を持たないのは $x^2 + \bar{1}x + \bar{1}$

だけであるから, 既約であるものは $x^2 + \bar{1}x + \bar{1}$ である

11.5

$x^2 + x + 1$ は $(\mathbb{Z}/2\mathbb{Z})[x]$ 上で既約で

$$(x^2 + x + 1)^2 = x^4 + 2x^3 + 3x^2 + 2x + 1 \quad (93)$$

$$\equiv x^4 + x^2 + 1 \pmod{2} \quad (94)$$

であることを注意すると, $x^4 + x^2 + \bar{1}$ は $(\mathbb{Z}/2\mathbb{Z})[x]$ 上で既約ではない

11.6

(1)

$$f(x) = 3x^5 - 2x^4 + x^3 - 3x^2 - x + 5 \quad (95)$$

$$\equiv x^5 + x^3 + x^2 + x + 1 \pmod{2} \quad (96)$$

一次の因式に対して, $\bar{0}, \bar{1}$ は $f(x)$ の根でないから存在しない. また, 二次の因式に対して, 既約なものは $x^2 + x + 1$ だけであるが, $x^2 + x + 1$ で割った余りは x であり, 0 ではないから, 2次 (3次) の因子も存在しない. 以上, $f(x)$ は $(\mathbb{Z}/2\mathbb{Z})[x]$ 上で既約である

(2)

$(\mathbb{Z}/2\mathbb{Z})[x]$ は $\mathbb{Z}[x]$ の商体であり, $\mathbb{Q}[x]$ も $\mathbb{Z}[x]$ の商体であるから, $f(x)$ は $\mathbb{Q}[x]$ 上でも既約である

12

12.1

$3 \nmid 1, 3 \mid 3, 3 \mid -6, 3^2 = 9 \nmid 3$ から, Eisenstein の既約判定法により, $f(x) = x^4 + 3x^3 - 6x^2 + 3x + 3$ は $\mathbb{Q}[x]$ で既約である

12.2

$f(x)$ が既約とし, $f(x+a)$ が可約であると仮定すると, $\exists g(x), h(x) \in \mathbb{Z}[x], s.t. f(x+a) = g(x)h(x)$ で, $f(x) := g(x-a)h(x-a)$ とかける. すると, $f(x)$ が既約であることより, $g(x-a)$ または $h(x-a)$ は ± 1 となり, $g(x)$ または $h(x)$ は ± 1 となる. よって, $f(x+a)$ は既約である

逆に, $f(x+a)$ が既約であるとし, $f(x) = g(x)h(x)$ とすると, $g(x+a)$ または $h(x+a)$ が ± 1 となり, $g(x)$ または $h(x)$ が ± 1 となる. よって, $f(x)$ は既約である

12.3

(1)

$x = y + 1$ とおくと

$$x^4 + 1 = (y + 1)^4 + 1 \quad (97)$$

$$= y^4 + 4y^3 + 6y^2 + 4y + 2 \quad (98)$$

となり, $p = 2$ とすれば, Eisenstein の既約判定法により, $x^4 + 1$ は $\mathbb{Q}[x]$ で既約である

(2)

(1) と同様に, $x = y + 1$ とおくと

$$x^{p-1} + x^{p-2} + \cdots + x + 1 = (y + 1)^{p-1} + (y + 1)^{p-2} + \cdots + (y + 1) + 1 \quad (99)$$

$$= \frac{(y + 1)^p - 1}{(y + 1) - 1} \quad (100)$$

$$= \frac{\sum_{k=0}^{p-1} \binom{p}{k} y^k - 1}{y} \quad (101)$$

$$= \sum_{k=1}^{p-1} \binom{p}{k} y^{k-1} \quad (102)$$

$$= \sum_{j=0}^{p-1} \binom{p}{j+1} y^j \quad (103)$$

で, Eisenstein の既約判定法により, $x^{p-1} + x^{p-2} + \cdots + x + 1$ は $\mathbb{Q}[x]$ で既約である

参考文献